

戦略としてのロゴス・エトス・パトス

柳沢浩哉

0

レトリックと呼ばれる学問体系は、約百年前に姿を消した。現在は、その末裔である比喩論、コンポジション、議論法などが生き残っているに過ぎない。しかし、この事實は、レトリックがその役割を果たし終えたことを意味するのではない。レトリックがその目的を達成できなかったことを意味しているのである。その目的とは、説得力のある文章を作ること、正確には、そのための技術体系を構築することである。むしろ、説得はレトリックの一貫した目的である。しかし、レトリックはその時々、この目的に限定を加え、特殊化された技術体系を構築してきた。法廷弁論、キリスト教のための宗教的説得、美文などがそれである。それらの、いったん特殊化された技術体系は自己増殖を始め複雑化していくこと、更に、複雑化した技術体系が、説得という実践的な目的に対応できないであろうことは、想像に難くない。そして、まさに

この二つが、近代においてレトリックに向けられた批判であった。

本稿で古代ギリシャの古典修辭学に注目するのは、そこに特殊化される以前の説得の技術があるからである。古典修辭学の中でも本稿は特に、ロゴス・エトス・パトスと呼ばれる一組の概念に注目する。これらの概念は、古典修辭学の基本概念の一つであったにも関わらず、その後のレトリックの歴史の中で次第にその価値を失っていった。これらは、古典修辭学の基本概念として、現在でも古典文献学者の記憶に留められてはいるが、その実践的価値が指摘されることはほとんどない。(1) 本稿は、これらの概念の実践的価値を再評価するとともに、この概念を軸とする修辭的分析の方法を提案することを課題とする。また、第二部では、その方法を使った事例として、湾岸戦争勃発時のブッシュ大統領の演説を分析する。

レトリックの体系を確立したのはアリストテレスである。レトリックは二千年以上の伝統を持つが、その姿は驚くほどに一貫しており、二千年以上にわたってアリストテレスの体系が基本的に維持されてきた。レトリックの基本概念の一つであるロゴス・エトス・パトスを確立したのもアリストテレスである。そして、彼はこれらの概念に対する最も詳しい研究者でもあった。彼のレトリックの集大成である『弁論術』は、⁽²⁾その大半がロゴス・エトス・パトスの考察に当てられている。彼は『弁論術』第一巻で、レトリックを説得手段を発見する能力であると定義した後、説得手段を、外から与えられる手段と弁論家が自らつくり出す手段との二つに分ける。外から与えられる手段とは、証人、契約文書、拷問による自白などである。一方、弁論家が自らつくり出さねばならない手段は更に、ロゴス・エトス・パトスの三つに分けられる。

ロゴス(論理)——論理的に証明するか、あるいは論理的に証明したと見せることによって説得する。

パトス(感情)——聞き手の感情を誘導することによって説得する。具体的には、怒り、不安、恐怖、勇気、憐れみ、義憤、恥、友情等々の感情を起こさせる。

エトス(性格)——話し手が自分の性格を描くことによって説得する。信頼できる、格好がいいなど。

これらの研究史に入る前に、次章では現在の身近な文章を使ってその有効性を示したい。

2

次のようなCMのコピーがある。

コルゲンETはEとT。Eが患部の腫れを抑えTが痛みを和らげます。だから効きます。コルゲンET。(風邪薬) バイオテックスの働きで、洗剤が木綿繊維の内部にまで入り込んで、汚れをしんから落とします。(洗剤)

この二つは論理による説得、すなわちロゴスによる説得である。一般に、薬と洗剤のCMは、その商品の性格によるものか、あるいは作る人間の好みによるのか、ロゴスによる説得が多いようである。アリストテレスは、ロゴスによる説得を類似的例を使った例証と、弁論に特有な推論、エンテュメーマの二つに分ける。次に示すのは代表的なエンテュメーマである。「」内に例文を示す。

類あるいは定義 「日本は経済大国なのだから、それにふさわしい貢献をすべきだ。」

因果関係 「彼の言葉には広島訛りがあるから、彼は広島出身だろう。」あるいは「お酒は体に悪いから、や

めた方がいいよ。」

状況 「そうするより他に仕方がないから、こうしました。」

あるいは「各界からの要請を受けて、選挙戦への出馬を決定しました。」

類似 「あの国では、68年にクーデターが起こっているが、現在の状況はその時のものに近い。従って、クーデターの起きる可能性は高いと言わざるをえない。」

比較 「彼は英語も満足に読めないのだから、フランス語が読めるはずがない。」

反対 「日本製品の輸入によって、国産品の売れ行きが急速に落ちている。従って、日本製品の輸入を制限すれば、わが国の経済状態は改善されるはずである。」

証言と権威 「原子力の専門家が日本の原発は危険だと言っているのだから、原発は廃止していくべきだ。」

アリストテレスは『弁論術』の中で二十八種類のエンテュメーマを挙げているが、それらは必ずしも必要十分なものではなく、彼自身の分類の中にも混乱が見られる。ここに挙げた七種類はアメリカの修辞学者リチャード・ウィーバーの整理した形である。(3) 先の二つのコピーで使われたのは、「因果関係」のエンテュメーマである。明快で説得力の強いことが「因果関係」の特徴であり、CMのコピーでエンテュメーマが使われる場合、そのほとんどが「因果関係」である。

次の例も薬のCMのコピーであるが、これはロゴスではない。あなたは今日、魚の子骨まで食べましたか？（カルシウム剤のCM）

このコピーは魚の小骨を食べなかった人を不安にし、その不安を利用して薬を買わせようとしたもので、典型的なパトスによる説得である。

朝食を抜くと体の中に十六時間も食物が入っていないことになります。そんなあなたは健康と言えますか。カロリー・メイトなら、一本で、三十種類の食物に極めて近い栄養がとれます。忙しい朝にはカロリー・メイト。

これも先のコピーと同様、不安を利用したものであるが、このコピーは不安の後に、商品を買えばその不安が解消できるという希望を示している点で、先程のものより手がこんでいる。不安はそれ自体が目的ではなく、説得のための手段であるから、最後に、説得の最終目的が希望という感情とともに示されたわけである。

不安——→希望

この型は比較的よく見られる。例えば、宗教の勧誘などでしばしば見られる、前世の因縁や祖先の霊を持ち出した説得などはこの型である。パトスは一つの感情だけでなく、このように複数の感情を段階的に使い分けることが多い。現在でも

評価の高い、ケネディーの大統領就任演説は、パトスの処理において特に優れており、そこでは「怒り——誇りと義務感——希望」という形で複数の感情が段階的に使い分けられている。⁽⁴⁾

ケネディーの就任演説に見られた怒りは、政治演説、あるいはアジ演説などではしばしば利用される感情である。昨年NHKから『社会主義の二十世紀』という番組が放送された。この番組で興味深かったのは、その中で見られたレーニン、スターリン、トロツキーなどの歴史的演説のほとんどが、怒りに訴え、怒りの感情を利用していったことであつた。社会主義に限らず、怒りという感情は政治キャンペーンにしばしば利用される。わが国においても、リクルート問題、反消費税などの政治キャンペーンでは怒りが利用されている。また、愛国心、怒り、政治批判（場合によってはアメリカ批判）が三位一体となつて国民を熱狂させている光景は、さまざまな国で見ることが出来る。（例えば、現在（91年春）の韓国、我が国のかつての安保闘争など。）怒りは強い感情であるばかりでなく、行動に結びつきやすい。そして、何よりも、人々の胸に容易に引き起こすことができる。怒りは快感だからである。アリストテレスは言う。「すべての怒りには一種の快感、復讐の期待から生まれる快感が伴うといわなければならぬ。（中略）それはしたたる蜜よりもはるかに甘く、人々

の胸に抜がってゆく。」⁽⁵⁾

政治に利用されやすい感情が怒りであるとすれば、マスコミ（特に報道）に利用されやすい感情は不安、あるいは恐怖である。——不安とは恐怖を予感した精神状態である。——

不安は、怒りほど行動に結びつくことはないが、優先順位の決定に大きな影響を及ぼす。つまり、その問題が重要な問題であるように感じさせ、問題に説得力を持たせることができる。「恐れは人を慎重にする」⁽⁶⁾のである。昨年十一月に、文部省が大学生に対して行った「学生生活実態調査」が発表されたが、⁽⁷⁾その中に「一つだけ意外な答えが含まれていた。

「現在関心の向くもの」を尋ねた項目で、スポーツ、ファッション、就職情報などの答えに混じつて、環境問題がスポーツに次ぐ二位に入っていたのである。この調査において、学生は、環境問題以外の社会問題、政治経済問題には一切関心を示していない。それではなぜ、高度な社会問題である環境問題だけに学生が高い関心を示したのであるか。無論、これがマスコミの影響であることは言うまでもない。しかし、マスコミが報道する頻度から言えば政治経済問題の方がはるかに上であり、また、それらは環境問題よりも身近な問題のほうである。学生に、優先順位の番狂わせを起こさせたのは、環境問題の持つ心理的効果である。地球環境が破壊されるかもしれないという環境問題は、聞く者に不安と恐れを与える。

この感情が優先順位の決定に影響したのである。アリストテレスは言う。「人は全ての悪を恐れるわけではない。例えば、不正や愚鈍を予想して恐れはしない。ただ、大きな苦痛や破壊をもたらすものだけを恐れるのである。」⁽⁸⁾ マスコミでは、不安に訴えやすい問題がしばしば扱われる。環境問題、ゴミ問題、日米摩擦、食品添加物や農薬の問題など。もちろん、マスコミが怒りを利用することもある。様々な汚職、女子高生の校門圧死事件、自動車の安全性の問題（日本と海外で安全基準が違うという問題）など。もう一つだけマスコミの例を挙げてみたい。今年の一月十八日、湾岸戦争勃発を報じた朝日新聞の社会面（地方方面ではない）のトップの見出しは次のようなものであった。「伝わらなかった広島への祈り」。言うまでもなく、広島と湾岸戦争は無関係である。また、広島が特別に湾岸戦争に反対していたわけでもない。ここで広島と湾岸戦争が結び付けられた理由を説明できるのはパトスだけである。先の戦争で傷ついた広島、その広島への祈りが無視された。この文脈は、読者に悲しみや怒りの感情をおこさせる。このように、マスコミは積極的にパトスを利用しており、その例はまさに枚挙に暇がない。

マスコミ以上にパトスを積極的に利用するものが煽動である。史上最大の煽動家であるヒトラーは、その著書『わが闘争』の第六章を「戦時宣伝」に当て、宣伝についての独自の

論を展開している。次に示すのはそこで述べられた結論である。

宣伝はすべて大衆的であるべきであり、その知的水準は、宣伝が目指すべきものの中で最低級のものがわかる程度に調整すべきである。それゆえ獲得すべき大衆の人数が多くなればなるほど、純粹の知的高度はますます低くしなければならぬ。(中略) 宣伝の学術的なものが少なければ少ないほど、そしてそれがもつばら大衆の感情をいっそう考慮すればするほど、効果はますます的確になる。しかもこれが、その宣伝が正しいか誤りであるかの最良の証左であり、二、三の学者や美学青年を満足させたかどうかではない。⁽⁹⁾

彼がその宣伝を進めるにあたり最大の関心をはらったのは、ロゴスとパトスの在り方だったのである。ロゴス・エトス・パトスが、ヒトラーの煽動すら包括してしまうことに、我々は改めてそれらの有効性を認めざるを得ないであろう。

マスコミを中心にパトスの例を見てきたが、次にエトスの例を見たい。アリストテレスは、エトスを実行するための方法として次の三つを挙げている。

思慮（フロネーシス）——公平さ、広い視野、客観的な見方、常識などを持っていることをアピールする。
徳（アレテー）——自分自身がどのような人間であるか、

あるいは何を考えているのか、直接語る。

好意（エウノイアー）——聴衆から好意を持たれる。感じ
がよい、謙虚である、格好がいいなどの印象を
与える。これは間接的に得られる。

「思慮」は客観性のアピール、「徳」は主観のアピールである。ただし、実際の場面でこの二つが使われることは少ない。「思慮」が説得効果を持つのは、知的な説得、あるいは公的な場面に限られる。そして、「徳」の使い方は更に難しい。ロラン・バルトは「徳」について、「結果を恐れず、芝居がかった誠実さを込めて直接的な言葉で表明される率直さの誇示である。」⁽⁹⁾（傍線筆者）と語る。例えば、自分が感じが良い、謙虚であるなどということのアピールする場合、「好意」を使って間接的にアピールすれば問題はないが、これを「僕は謙虚なんですよ。」と「徳」を使って直接に言えば、たいていは反感を買ったり、滑稽に見えたりして逆効果となってしまう。「ブルータスは公明正大の士である。」これは、シェイクスピアの『ジュリアス・シーザー』の有名なせりふである。そして、このせりふは、「徳」の持つ危険性を巧に利用しているのであるが、この点は従来指摘されていない。——シーザーを暗殺したブルータスは、市民の前で自己を弁護する見事な演説を行い、市民の反感を抑えたばかりか、ローマの英雄となってしまう。しかし、続いて演説をした宿敵アントニー

は、ブルータスを讃えながらも、ブルータスに対する市民の反感を巧にかき立て、最後には、ブルータスに対する反乱を起こさせることに成功する。この時、アントニーが彼の演説の中で、何度もしつこく繰り返すのが「ブルータスは公明正大の士である。」というせりふである。——このせりふを考へ出したのはアントニーではなくブルータスである。と言うと奇異に感じられるかもしれない。が、これは事実である。ブルータスは演説の初めに次のように言っている。「私が何より公明正大を尊ぶ男であることを信じてもらいたい。」⁽¹⁰⁾ アントニーは、このせりふを繰り返しただけなのである。ブルータスのこのせりふは自らを語った「徳」である。「徳」は危険性の高い方法であるが、ブルータスは巧みに危険を回避し、この時には市民の賛同を得るのに成功している。しかし、このせりふも「徳」の持つ潜在的な危険性を内包しており、宿敵アントニーは、このせりふを何度も繰り返すことによつて、その危険性を露呈させていった。つまり、始めのうちこそ、このせりふを額面どおりに受取っていた市民も、何度も繰り返されるうちに「ブルータスは本当に公明正大なのか。もしかしたら、その逆なのかもしれない。」と感じ始め、ブルータスに対する反感をつのらせていくのである。相手のせりふを繰り返すだけでこれだけの効果を上げたことは見事と言う他はないが、アントニーが「徳」に目をつけなければ、

このような劇的な効果は上げられなかったはずである。

エトスの中で最も説得効果の強いものは「好意」である。そして、「好意」はさまざまな形で作り出すことができる。例えば、我々がしばしば目にする、必要以上に難語句を散りばめた論文など、「好意」に訴えた一つの形である。それは、自分がいかに難しいことを考えているか、用語選択のレベルでアピールしているからである。また、文法構造が不明なほどに難しい言い回しを使う政治家なども、難しい言い回しによって、自分の高尚さ、あるいは慎重さなどを表現しているのである。もちろん、冗談やお世辞などを使って、気に入られようとするのも「好意」の一つである。このように、「好意」はさまざまな形で作りだせるため、ローマのクインティリアヌスのように、文章全体がエトスの表現であるとする修辞学者もいる。しかし、本稿はアリストテレスの考え方に従って、「好意」を表現している意図を明確に感じさせる表現に「好意」を限定したい。もちろん、文章を分析する場合、「好意」であるか否かの判断は主観的にならざるを得ないが、客観的な判断が難しいことと、その有効性は全く別の問題であり、その有効性は分析結果におけるメリット、デメリットによって判断されるべきである。

以上のように、ロゴス・エトス・パトスは、説得的な文章の分析あるいは作成の上で重要な概念である。しかし、冒頭

に指摘したように、ロゴス・エトス・パトスはレトリック史の中で次第に忘れられていく。本章では、ロゴス・エトス・パトスの研究史を概観し、更に、レトリックにおけるその位置付けを考えてみたい。

3

アリストテレスの後、レトリックはローマに入りキケロに受け継がれる。¹²⁾キケロのレトリックは文体論のさきがけとも言われるように、一般的な法則を導くことよりも、個人個人の文体に重点を置いたレトリックである。このため、彼は基本的にはアリストテレスのエトス、パトスを受け継ぎながらも、それらを文体論に吸収させてしまう。すなわち、キケロにとって、エトスとは弁論家の個性に合った文体の工夫であり、パトスとは内容にふさわしい文体で文章を作ることである。この背景には、思想と表現とを不可分のものとする彼の考えがあり、彼は、感情という第三の要素を文章の中に持ち込むことを嫌ったのである。アリストテレスのエトス、パトスの最大の特徴は、その戦略性にあるが、エトス、パトスが文体論に吸収されたことにより、その戦略性は希薄なものとなった。更に、古代ローマでは、重厚さ、冷静さ、礼儀正しさとといったローマの品性が文章に要求され文体の自由が制限された結果、エトス・パトスは手枷足枷をつけられた格好

となり、その戦略性は骨抜きにされてしまう。その後、キケロのレトリックは、同じくローマの修辞学者クインティリアヌスに受け継がれるが、彼は、思想と表現とを不可分のものとするキケロの考え方を踏襲しており、そのパトス論も、同様の性格を有している。ただし、弁論家の教育を重視したクインティリアヌスは、エトスについては、キケロとは異なりプラントンのエトスを採用する。プラントンの提唱するエトスとは、徳を備えていることが弁論家の必要条件であるというものであり、アリストテレスのエトスとは全く次元の異なる、戦略とは無縁のものである。⁴³⁾

ローマ以降、エトス研究においては、文体の中に弁論家の個性が表現されるとするキケロのエトスが継承されていく。一方、パトス研究においては、中世キリスト教のレトリックにおいて、知情の二分法がとられ、ややその戦略的性格が復活するものの、情には知以下の地位しか与えられなかったため、パトスが主要な研究対象となることはなかった。更に、ルネサンスにおいて、インヴェンティオー（構想）をレトリックの領域から削除するという、レトリックにとっては致命的とも言える改革が行われ、エトス、パトスはその存在基盤すら危うい状態となってしまう。

エトス、パトスが徐々にその地位を奪われていったのとは対照的に、ロゴスは、アリストテレス以降も、レトリックの

中心課題として君臨し続ける。簡単に言えば、感情による説得は邪道であるとして、その説得効果にも係わらず、その説得効果ゆえ、と云うべきかもしれないが、エトス、パトスは研究対象としての地位を剥奪されていっただのである。ここで注意する必要があるのは、エトス、パトスという対立する概念を失ったロゴスは、もはや、ロゴス・エトス・パトスという一組の概念の一角をなすロゴスとは、異質の概念となっている点である。

本稿でロゴス・エトス・パトスを扱うにあたりアリストテレスに注目しているのは、その研究の量的な面からではなく、その戦略性という質的な面からである。が、この点に関しては更に説明を要する。レトリックには宿命とも言える問題がある。それは、「白を黒と言いくるめる」という言葉に代表されるように、レトリックの技術が悪用される問題である。アリストテレスも主張しているように、レトリックに限らず技術を研究する学問は全て、その悪用という問題を内包しているはずなのであるが、なぜかレトリックだけが、今日にいたるまでこの点を攻撃され続けてきた。これに対し、アリストテレスは、レトリックに次のような定義を下すことにより、この問題を巧みに回避した。「レトリックとはいつでも利用可能な説得手段を発見する能力である。」⁴⁴⁾ 彼はこの定義によつて、レトリックという装置と、その装置から産出される

結果とを切り離すことに成功し、純粹な技術体系としてのレトリックを確保したのであり、これによって、レトリックを、純粹に説得技術として、すなわち実践的、戰略的に研究できたのである。この立場は、レトリックに対し否定的なプラトンとも、あるいは、説得のためなら手段を選ばぬソフィストとも、更に、エトスとパトスを文体に吸収させ戰略的色彩を弱めたキケロやクインティリアヌスなども異なるものである。

次章では、佐藤信夫氏のレトリック・モデルを使つて、レトリックにおけるロゴス・エトス・パトスの位置付けを考えたい。

4

わが国におけるレトリック研究の第一人者である佐藤信夫氏は、「消滅したレトリックの意味」と名付けられた論文の中で、⁴⁰レトリックの全体像の把握を試みている。佐藤氏は、今日の拡散した「レトリック」の意味を「レトリック観」としてとらえ、その諸相を次の三つに分類する。

「レトリックA」—— 技術体系としてのかつて重んじられていた制度的な学科としての、そしてこんにちではたいへい愚かしい規則集として想起されるレトリック。

「レトリックB」—— 説得効果としての、言語戦術として

の、そしてしばしば嫌悪すべき欺瞞の対象としてのレトリック。

「レトリックC」—— 修辭表現としての、目立つ言葉づかいとしての、そしてときには浮薄な裝飾としてのレトリック。

これについては多少の説明が必要である。Cは、比喩論などに代表される文彩（フィギュール）を指しており、レトリックの技術体系の一部である。従つて、CはAの部分集合であり、佐藤氏が分類するレトリックの諸相は、實質的にはAとBの二となる。

佐藤氏の論で最も優れているのは、A、B、Cの分類ではなく、Aにおけるレトリックの技術体系を素描したモデルである。このモデルは、伝統的なレトリックの技術を立体的に整理したもので、彼の言うとおり「伝統的レトリックの体系的平均的モデル」と言える優れたものである。（佐藤氏の言葉を借りて、このモデルに記述された技術を「レトリックの装置」と呼ぶことにする。）しかし、この「レトリックの装置」の中にロゴス・エトス・パトス、特にエトス、パトスの入る余地はない。むしろ、伝統的レトリックにおいてエトス、パトスが忘れられてしまったことがその一つの原因であるが、これにはそれ以上の意味がある。ロゴス・エトス・パトスは「レトリックの装置」とは異なるレベルに属する技術だからである。「レトリックの装置」は具体的な修辭表現をアウト・

プットするが、それに対し、ロゴス・エトス・パトスは「レトリックの装置」の動かし方を決定するメタ技術なのである。具体的に言えば、弁論の場や目的を考えて、どのような方向から説得するか、例えば、冷静な論理で詰めるか、聴衆の同情を集める方向でいくか、あるいはスケープ・ゴートを立てて聴衆を怒らせるのか、といった説得の全体的方向を決定する領域がロゴス・エトス・パトスである。一方、「レトリックの装置」は、その方向に合わせて具体的な修辭表現を作り出す領域である。両者の関係は、目的と手段であり、これに最も近いアナロジーを見せるは、戦略論における戦略と戦術である。戦略とは、戦争目的を明らかにし、その戦争目的を達成するためのプランを立てる領域であり、そのプランを実行するための具体的な作戦を作る領域が戦術である。従って、ロゴス・エトス・パトスとは、説得の戦略を決定する部分であるとと言える。説得的な文章において、「レトリックの装置」によって作られた修辭表現は、説得効果の上で二次的な意味しか持たない。一次的な意味を持つのは、ロゴス・エトス・パトスにおいて決定される説得の戦略である。

レトリックは百年以上前に滅んだ学問である。これは、レトリックの実体である「レトリックの装置」が、実用に耐えない無用の長物であったからに他ならない。佐藤氏は、説得効果としての「レトリックB」は実体としては存在しないと言う。つまり、従来のレトリックに、もはや説得力は期待で

きないということである。しかし、ロゴス・エトス・パトスを戦略として復活させることにより、レトリックに説得効果を持たせることができるであろう。

説得的文章を作成する技術は、同時に分析のための技術である。そして、本稿で提案したレトリック体系から導かれる分析方法は、説得の戦略の解明を目的とする方法である。ただし、現段階では作成のプロセスを解明していけないため、分析方法においても目的設定以上のものは提出できない。しかし、方法を構築する上では目的を定めることが最も重要であり、更に、この目的には次に示すような特長がある。

① 説得の戦略という、説得的文章における根本的な部分の解明を目的としている。

② 修辭的分析における目的を、ある程度具体的かつ実践的に示している。

③ 説得的文章を自律的価値を持つものとしてとらえているため、文章に書かれていない事実まで考慮する必要がある。この点、この方法の基本的立場は、I・A・リチャーズの提案したニュー・クリティシズムと同じものである。

④ 分析の手掛かりとして、従来のレトリックにおいて修辭技巧として整理されているものを使うことができる。

この目的を達成するために重要なことは、表現を、複数の選択可能性の中からの選択結果としてとらえることである。具体的に言い換えれば、特定の表現をシンタクマティック、パ

ラディゲマティックの方向から検討することである。そして、特にパラディゲマティックの観点から検討する場合、従来のレトリックにおいて修辞技巧として整理されているものが役立つ。

第二部では、この方法を使った事例として、湾岸戦争勃発時のブッシュ大統領のテレビ演説を分析する。

【注】

- (1) このような指摘がわが国において少ないということは言うまでもないが、アメリカのデータ・ベースERIC（教育関係の文献を中心に、毎年数万点の文献を収録している）による検索（一九七〇—一九八九年）でも、ロゴス・エトス・パトスを、本稿と同様の意図で使っている論文は見当たらなかった。
- (2) アリストテレス、池田美恵訳『弁論術』（『世界古典文学全集』第一六巻、昭和四一年、筑摩書房）をテキストとして使用した。

- (3) Richard M. Weaver, *A Rhetoric and Composition Handbook*, William Morrow and Company, (1967), pp. 136—154
エンテュメーマに関しては香西秀信氏の次の論文に詳しく。
5。

『説得的言語の発想形式に関する研究(1)』（『琉球大学

教育学部紀要』第二九集、一九八六年）

「議論の型と論者の思想の関係について」（日本読書学会『読書科学』第三二巻一、一九八六年）

その他の文献は、拙稿「レトリック関係文献目録(1)」

（筑波大学教育学系『教育学系論集』第十四巻一、平成元年十月）のトポスの項目を参照されたい。

- (4) 拙稿「政治演説の修辞学的考察—ケネディー大統領就任演説におけるエトス—」（表現学会『表現研究』第五三号、平成三年三月）

(5) アリストテレス前掲書、一三七八b

(6) アリストテレス前掲書、一三八三a

(7) 毎日新聞（一九九〇年十一月三日）に掲載された資料を使用。

(8) アリストテレス前掲書、一三八二b

(9) アドルフ・ヒトラー、平野一郎・將積茂訳『わが闘争（上）』（昭和四十八年、角川文庫）259—260ページ

(10) ロラン・バルト、沢崎浩平訳『旧修辞学—便覧—』（一九七九年、みすず書房）122ページ

(11) シェークスピア、福田恆存訳『ジュリアス・シーザー』（昭和四三年、新潮文庫）第三幕第二場（77ページ）

(12) ロゴス・エトス・パトスの研究史については次の文献が詳しい。

ピーター・ディクソン、忍足欣四郎訳『修辞』（『文学

批評ゼミナール』第二〇巻、研究社、昭和五〇年)

14〜30ページ

John F. Wilson and Carroll C. Arnold, *Public Speaking as a Liberal Art*, Ally and Bacon, 1983, pp. 309-319

Nan Johnson, "Ethos and the Aims of Rhetoric", in Robert J. Connor et. al. *Essays on Classical Rhetoric and Modern Discourse*, Southern Illinois Univ. Press, 1984

(13) プラトンがレトリックを批判したことは有名であるが、その批判の一つとして、プラトンは弁論者に徳を備えていることと厳しい条件を要求した。レトリックにおいて、プラトンのエトスという場合、この条件を指す。アリストテレス前掲書、一三五六a

(14) 佐藤信夫「消滅したレトリックの意味」(『思想』六八二号(特集レトリック)一九八一年四月)

第二部

演説のテキストは、ワシントン・ポスト紙(一九九一年一月十七日付)に掲載されたものを使用した。ただし、紙幅の関係で本文あるいはその要約は省略する。

これは戦争開始を宣言したテレビ演説である。戦争開始を宣言する演説の内容は単純であり、ほぼ次の四つの要素に決まっている。

- ① この戦いは避けることができない。
- ② 敵は悪(残酷、無法、嘘つき等々)である。
- ③ 正義は我々にある。
- ④ 我々は必ず勝つ。

(第五の要素として戦勝後の公約が加わることもある。)戦争の開始宣言が特殊な演説であるだけに、いずれもパトスに強く訴える内容である。この演説にも①④の要素は全て含まれている。ただし、③④については、世界が味方をしてい、あるいは戦争は早期に決着される、といった間接的な言及に留まっているため、直接的な言及のある①と②についてまず検討してみたい。

この演説の特徴の一つは、その大部分(約三分の二)が①「戦いが避けられない」の説明に割り当てられていることである。そこでは、国務長官、国連事務総長をはじめ多くの国々の説得がいずれも失敗したこと。多国籍軍の威圧や経済制裁

が効果を挙げなかったことなど、戦争回避のあらゆる努力が失敗に終わったことが詳しく述べられている。つまり、戦争以外に取るべき道がないという事実から、「戦いが避けられない」ことを論証しているのである。この説得形式は、エンテメーマの中の「状況」である。しかし、①は他のエンテメーマを使っても述べることができる。例文を作ってみよう。

「類あるいは定義」 「イラクはクウェートを侵略した。侵略を排除できるのは武力だけである。」

「因果関係」 「フセインの野望が、クウェートを侵略し、世界の平和を脅威にさらしている。戦いを望み、戦いを始めたのはフセインである。我々は、フセインの野望を打ち砕き、世界をその脅威から守らねばならない。」

「反対」 「冷戦が終わり中東も安定に向かっていた。イラクの侵略を排除すれば、中東と世界の平和が回復するのである。」

これ以外のエンテメーマを使うことも可能である。例文を見る限り、「状況」よりも「類あるいは定義」あるいは「因果関係」を使った方が説得力が強いように思われる。さまざまにエンテメーマを研究していることで知られているアメリカの修辞学者リチャード・ウィバーも「状況」には否定的であり、その論証の弱さについて次のように述べる。

「状況」は因果関係の中に含め得るものであるが、そこに深い洞察はなく、最も非哲学的なエンテメーマと言える。

救いの見出せない状況を自然の手に委ねるのであり、動かす得ない事実の存在を指摘するだけの無力さの現れである。

(1) ブッシュがこのような「状況」を選択した意図について、この部分だけで結論を下すことはできない。が、「状況」を選択したことによる明らかなメリットがある。すなわち「状況」で要求される事実の提示が、自らの多面的、客観的な見方のアピールにつながることである。つまり、エトスの中の「思慮」のアピールである。次に②を検討してみよう。

②は敵の糾弾である。敵の糾弾は聴衆のパトスを刺激する上で効果的である。しかし、この演説における残虐さの糾弾はわずかに一行で終わっており、しかも次のように淡々としたものである。「フセインは、言葉では言い尽くせない残虐行為を、クウェート人に対して行うよう命じた。傷ついたり、殺されたりした中には罪のない子供もいる。」ここには、強調や誇張が見られないばかりか、「言葉では言い尽くせない」という婉曲表現さえ使われている。敵の残虐さは、それを「活写法」（目に浮かぶような描写）を使って具体的に描写すれば、いくらでも強くパトスに訴えることができる。しかし、彼はあえてその逆の方法で描写したのである。更に彼は、イラクを糾弾する根拠としてこれ以外に、危険な兵器を持っていること、世界経済に悪影響を及ぼしていることなどを合わせて指摘し、ここでも「思慮」のアピールを忘れていない。

①②において見られた傾向は、演説の構成においても見られる。一般に、演説の最終部分では盛り上がりが必要とされ、最終部を盛り上げるための手段として、多くの場合、希望、自信、義務感など聴衆に快感を与えるパトスが使われる。しかし、この演説は最終部分での盛り上がり欠ける。ブッシュがこの部分に持ってきたのは、出征兵士とその家族への感謝という、いささか偽善的な、効率の悪いパトスである。そのため、これに続く「同盟国に恩寵あれ！アメリカに神の恩寵あれ！」という最後の祈りも、湿っぽさが感じられ、力強さに欠ける。このように見ると、演説の最終部は失敗したようにも思われよう。しかし、これは彼の綿密な計算の下に作られた見せかけの「失敗」なのである。この直前、彼はアメリカの兵士の優秀さを讃え、聴衆のパトスをくすぐっている。当然、聴衆は更に強いパトスを、次に期待したはずである。しかも、場所は演説の最終部である。つまり、聴衆のパトスへの期待が最も高まった時に、ブッシュはその期待を見事に裏切ったのである。この「裏切り」によって、聴衆は、この演説ではパトスが非常に抑制されていること、更に、ブッシュがパトスによって説得する人物ではないことを、強く感じたはずである。むしろ、これがブッシュの狙いであった。最後に、この演説のもう一つの重要な特徴として、虚偽が見当たらないことを指摘しておきたい。これは当然のことのように思えるかもしれない。しかし、戦争開始を宣言する演

説は、その特殊な性格から虚偽が入り込みやすいのである。ちなみに、これと同時に発表されたサダム・フセインの演説の一部を見てみよう。大字の部分に虚偽が見られる。虚偽はいずれも広義の「不当予断の虚偽」（その弁論の中で証明すべきことを、前提としてしまう虚偽）にあたる。

裏切り者どもは十七日午前二時半に攻撃を始めた。臆病者たちは、卑劣にも我々を攻撃した。

悪魔ブッシュと犯罪的なシオニズムは過ちを犯した。悪魔の軍隊と正義の軍隊との間で、根源的な戦いが始まった。⁽³⁾

これらの虚偽はいずれもパトスに訴えることを目的としている。フセインに限らず、このような演説における虚偽の多くは、パトスの刺激を狙ったもので、ブッシュの演説に虚偽が見られないことは、これまでの分析結果と合致するものである。

以上の考察から導かれる事実、いずれも意外なものばかりである。テレビ演説のように不特定多数を対象とした説得においては、一般にパトスの説得力が強く、ロゴスやエトス（その中でも特に「思慮」）は説得力が弱い。第一部に引用した『わが闘争』の中でヒトラーが強調していたのも、まさにこの点である。しかし、ここまでの考察が明らかにしているのは、ブッシュの演説における次のような事実である。

A パトスが極力抑えられている。

B 「思慮」が最も重視されている。

C ロゴスに演説の大半のスペースが割かれている。しかも、ロゴスにおいて選択されているエンテュメーマは、最も説得力の弱い「状況」である。

ことごとく常識の逆をいく選択であり、この演説においては、意図的に説得力が弱められているとしか考えられない。一方、第二部の最初に①④で示した、戦争開始宣言に必ず盛り込まれる四つの内容を思い出していたきたい。それらはいずれも、パトスに強く訴える、説得力の非常に強い内容であった。そして、ブッシュ演説にはこの四つの内容の全てが盛り込まれている。つまり、この演説の内容自体は説得力が強いのである。その結果、この演説においては、説得力の二重構造とも呼ぶべき、説得力のアンバランスが生じていることになる。つまり、ロゴス・エトス・パトスという説得形式のレベルにおいては説得力が非常に弱いのに対し、それらが媒介すべき内容のレベルにおいては説得力がたいへん強いのである。一見、この説得力の二重構造は、不調和であり、演説の完成度を低めてしまっているように思われる。しかし、この二重構造を作り出すことこそ、ブッシュの真の狙いだったのである。彼は、アメリカの選択すべき道が戦争以外には残されていないことを確信していた反面、自らがアメリカを戦争に導く進軍ラップとなることを恐れていた。つまり、反対を許さず、しかも、自らの雄弁さを印象づけられない演説。これ

が、この演説に要求された条件であった。そして、この相入れない複雑な条件を満たすために考案されたのが、説得力の二重構造という戦略であり、それを実行するため、ロゴス・エトス・パトスにおいて異例な選択が行われたのである。つまり、この演説におけるロゴス・エトス・パトスは、雄弁という印象を与えないために、説得形式における説得力を抑制する役割を果たしているのである。ただし、それらの中で、パトスの抑制と「思慮」重視の役割はそれだけに留まらぬ。パトスの抑制は、自分が、感情によって説得するような人物ではないことを聴衆にアピールするし、「思慮」は自らの冷静さをアピールするからである。つまり、この二つは直接的にも、雄弁な印象を防ぐ役割を果たしており、直接、間接の二重の形で雄弁という印象を防いでいることになる。演説の完成度が、表面的な説得力や、聴衆に与える快感などによって測られるとすれば、この演説の完成度は決して高いものではない。しかし、弁論者の意図の実現という点から完成度が測られるとすれば、この演説の完成度は非常に高いと言える。ブッシュは、自らの意図を実現するために、表面的な説得力を犠牲にしたのである。

【注】

(1) Richard M. Weaver, op. cit., *A Rhetoric and Composition Handbook*, pp. 141-142

- 原文では、*enthymema*の代わりに*topics*の語を使っている。
- (2) これについては、ロラン・バルト前掲書、133～134ページを参照。
- (3) テキストは朝日新聞（一九九一年一月十八日付）に掲載されたもの。ただし、同新聞に掲載されたのは演説の抜粋である。